

審査結果の要旨

魚住孝至 宮本武蔵 - 日本人の道

審査の対象となった本論文は、宮本武蔵について、周辺諸資料を収集・整理し史料批判を厳密に行ない、評伝・逸話等で流布した虚像を正すとともに、『五輪書』等、その全著作を思想解説し、宮本武蔵の新たな思想史的位置づけを図ったものである。

第一部は、武蔵の実生涯を史的に解明している。江戸時代以来積み重ねられてきた様々な虚像を排して、信頼しうる史料のみに基づき、また養父や養子、その他関係した周辺人物をふくめ武蔵が生きた時代の社会の状況も合わせ論じることで、より実像に近い武蔵像が描かれている。すでに二刀を遣った一流の武芸者であった養父のもとで少年期から鍛錬し、武者修行で実戦勝負をしていた20代半ばにすでに勝負の術理を書いた『兵道鏡』を著していたこと、壮年期は譜代大名の客分となり諸芸を嗜んでいたこと、晩年の『五輪書』に至るまでの具体的な過程など、本論文において初めて明らかにされている。

第二部は、武蔵の思想の集大成ともいえる『五輪書』を、形・動きなど身体感覚の裏付けを持った言葉で具体的に解釈した上で、その「兵法の道」を思想史的に位置づけている。核となる剣術について武蔵は、術の基礎を重視して自らの体の感覚に基づいた術理論を追求し、太刀遣いにも合理的な原理を見出し、その稽古法を明確にした上で、実践的な心得を展開したことが跡づけられている。また剣術における戦い方は、合戦の場にも応用可能であることを示し士卒から大将まで心得るべき兵法の論として展開し、さらにその兵法の理は諸芸にも通じるとともに、「空」を思い取って修練に徹すればおのずから迷いのない「実の空」に至りうることを示して、それを「道」として把握しようとした所以が明らかにされている。その上で、道元、世阿弥、心敬、千利休、松尾芭蕉等のそれぞれ終生追求された「道」 - 「修行」のあり方の伝統を踏まえながら、武蔵は、武士として個の意識を強烈に持ちながら実戦武術であった「兵法」を、生涯追求すべき人の「道」へと高めたと評価している。

資料編には、諸写本を渉猟した研究によって初めて武蔵のものと判明した三つの著作（『兵道鏡』、『兵法書付』、『五方之太刀道』）の文献学的考察とその翻刻、『五輪書』の6写本を校合して従来のテキストの不備を校訂し、さらに書状や水墨画の鑑定・分類一覧表、二天一流の伝承技術等の諸資料、その他周辺も合わせた関係諸資料も整理して載せている。

以上のように本論文は、これまで学術的に本格的に研究されてこなかった宮本武蔵を綿密な史料批判に基づきその全体像を明らかにするとともに、それを日本の武道、ひいては道一般への普遍的理解に繋げようとしたものとして高く評価することができる。「人を殺すこと」の技術の精練の倫理的な意味や、「道」の徹底が普遍に繋がるという普遍の内実の解明など、さらに考察すべき課題は残されているが、審査委員会としては、本論文が博士（文学）の学位に十分ふさわしいものと判断した。